



平地一郎著

『労働過程の構造分析』

藤澤 建二

本書を簡潔に評することは難しい。それは本書の取り扱う領域が、欧米労働過程論争、情報技術論、鉄鋼労働論、生産管理論、労務管理論、労使関係論等々と多岐に亘っており、しかもそれぞれが慎重な吟味を必要とする叙述に満ちていて、評者には難解な書であるからである。従って、著者には不本意だろうが多少型破りの書評にならざるを得ない。

本書の目的はその副題からすると現代日本鉄鋼業の管理・労働・賃金の実態分析に置かれているようにみえるが、評者には理論仮説提示の書と思える。その大筋の論点の一部を大胆に再構成して要約するならば、次の通りである。

①労働衰退説（ブレイヴァマン）・労働単純化説は間違いで、「ある労働は非熟練化」（p. 52）するとはいえ、「別の労働は熟練化する」（p. 52）ので、熟練労働は「歴史的に一定」（p. 29）である。「労働とはどのようなものでも習熟するのに時間を要する」（p. 44）ので、「熟練労働とは『労働』と同義なのである」（p. 44）。

②資本による労働の支配は、資本の意思を、管理を媒介として労働者に再対象化（＝労働者の合意）することによってなし得る。労働者が資本の意思を自らに再対象化するには、労働は目的意識的活動である熟練労働でなければならない。それ故資本は、「資本の意思を再対象化する主体としての契機が消失する」（p. 5）熟練の解体を目指すはずがない。資本主義的管理は「熟練労働を前提として成り立ちうる」（p. 208）のである。

③独占段階における熟練は、独占体の「内部昇進制」のなかでの熟練形成がその中心概念である」（p. 29）ため、「社会的通用性に乏しく、曖昧な概念」（p. 29）にならざるをえない。

④熟練が「歴史的に一定」だとすれば、資本主義

的労働過程で変化しているのは「労働の社会的結合」様式である。それは「生産管理における製造スケジュールの作成（およびその監視機能）として」（p. 50）見ることが出来る。「製造スケジュールは、労働を結合させようとする資本の意思の現実態であって、まさに、こうした労働の形式を労働者が自らの労働のなかに再対象化することによって、生産力化すると考えられる」（p. 50）から。

こう再整理することで、著者が主張したいことが評者には少し見えてくるが、逐一のコメントは割愛せざるを得ないとしても、次の点だけは触れておきたい。

著者はブレイヴァマンの「構想と実行の分離」論を批判して次のように述べる。

「労働者の構想によって導かれる実行とは『労働』にほかならないから、彼の議論は、労働を管理するために労働を解体するという奇妙な論理構造を持っている。明らかにブレイヴァマンの主張は誤りである。労働が労働者自身の構想によってしか導かれなないからこそ、その搾取もまた不安定・不確実なのである。」（p. 32）

だが、ブレイヴァマンの「労働者の構想によって導かれる実行」とは何よりも熟練労働であって、それ故、資本は労働を管理するために熟練労働から構想を奪うことによって熟練労働を「解体」し、構想から分離された実行＝「労働」を管理可能にしようとする整理したのではなかっただろうか。著者のいうように「労働が労働者自身の構想によってしか導かれなない」とすれば、構想と実行を分離することは出来ず、労働の細分化→単純化は出来ない。従ってこの世に労働の単純化など存在するはずがないということになるだろう。だが評者は、例えば『現代日本の職場労働』（新日本出版社）が詳細に報告した

労働が、「労働者の構想によって導かれる実行」とは到底思えないのである。

とにかくこうした枠組みのもとで本書は「熟練の衰退がながらく発見されてきたとされる産業（鉄鋼業……引用者）における熟練労働の存在」（p. 9）を「強調」する。著者は評者らが鉄鋼労働単純化説を唱えていると錯覚し、「コンピュータ制御された転炉操業においても、なお熟練を要する」（p. 89）と「強調」する。だがそのこと自体は取り立てていうほどの新しい知見ではない。問題はその熟練がどういう性格のものかということである。そしてそれは、コンピュータ制御操業技術の現段階における限界なのか、それとも熟練労働を技術的に不可欠なものとしているのか。著者もいうように現段階では「熟練労働を介在させない限り、効率的な生産の課題は解決することができない」（p. 92）。つまり、熟練労働が必要か否かは技術だけが一義的に決めているのではない。有り体にいえば、熟練を基礎に資本の管理に抵抗しようとはしない、従順で安価な熟練労働者を確保出来るのであれば、資本は安んじて熟練労働者を活用し、極限まで生産効率を高めようとするだろう。だが、テラーが問題にした現実はそうではなかったが故に「科学的管理法」を案出したのではなかったのか。なお評者はプレイヴァマンには逆らって（というのは正確ではないのだが）、「ホーソン実験」が見いだしたものを重視する。熟練を「解体」されてもなお労働者は資本の管理に抵抗を続けるのだということに、もっとヒントを得たい。

また、「技術革新が技能序列（熟練の序列）を崩壊させる」という議論に対する疑問と批判」（p. 11）を実証しようとしているが、個々の職務に「技能序列」があり、熟練の「形成序列」（p. 11）があることは、何ら不思議なことではない。問題はそれが作業のプール化のもとで、かつてのような労働者序列としては機能し難くなってきたことが「議論」されたのであ

る。要員削減→作業のプール化→職務給のプール化→職務の大括りの果てに、「工長—統括—一般」という「役割区分」が導入され、職務給から職能給に切り替えられた。従って、「職務とその序列の存在という現実の前に、……職能給への一本化がどれほどの賃金体系の安定を保証するかが、きわめて疑問」（p. 221）という評価は、「疑問」には共感したいが「職務序列」の存在を根拠とするのは的を射ているとは思えない。

ところで、熟練問題を議論するとき心に留めておかなければならないことがあると評者は考える。労働の一部に熟練が必要とされ熟練労働が残るとしても、それが単純労働に従事しなければならない多くの人々にとって何の慰めになるのか、ということである。マルクスもプレイヴァマンも、まさにそのことを問題にしていたのではないだろうか。

それはさておき、「生産管理」を詳述していることは本書のメリットの一つである。鉄鋼大企業が各工程の直結を生産効率的に追求するなかで、タイトな製造スケジュールが現場に投げかけられ、その製造スケジュールに従うことを余儀なくされる現場の超過密労働。それをこなすためには「熟練」が必要不可欠である、その仕組みを生産管理＝製造スケジュールの作成・修正過程から跡づける。だが、労働者が製造スケジュールの要請を本音でどのように感じているのか、そのことを掘り起こさない限り、資本の意思が労働者にいかに「再対象化」されているのかを論証していないだろう。労働者が製造スケジュールに従うことが、直ちに資本の管理に「同意」を与えていることになるのかは、もう少し慎重に吟味したい。論ずべき点はまだまだたくさんあるが、紙数が尽きた。妄言多謝。

(2004年10月・御茶の水書房刊・5000円)

(ふじさわ けんじ・岩手大学)